

研 究 主 論 文 抄 録

論文題目

経験・記憶に基づいた地域景観を捉える一手法の構築

熊本大学大学院自然科学研究科 環境共生工学専攻 社会環境マネジメント講座

(主任指導 星野 裕司 准教授)

論文提出者 尾野 薫

主論文要旨

近年、景勝地や観光地ではない日常の風景や地域住民の暮らしから地域や都市空間を捉え、都市計画やまちづくりについて考えることに、注目が集まっている。住民が地域に対するイメージや大切だと感じる物事について調査し、住民参加型のまちづくりとしてワークショップを行い、住民同士が共有した物事を地域資源や景観構成要素と定義し、計画へと反映させる。こうした手法によるまちづくりや計画策定が、多く行われるようになった。地域住民の暮らしという視点から地域や都市空間を捉えるためには、生活行事や景観・風景がすぐに思い浮かぶような代表的なところだけではなく、住民の暮らしの中で蓄積されて経験・記憶として残っている全ての物事を、経験・記憶に基づいた地域景観として捉えることが必要であると考え。この経験・記憶に基づいた地域景観は、地域の中で住民の中に蓄積された物事として地域を理解する際や、地域住民や行政団体による地域内の空間の利活用計画などを、地域住民が日常生活の一部として受け入れるための手助けとして利用することができる。こうしたまちづくりへの展開を視野に入れた上で、地域住民の経験・記憶に基づいた地域景観とは何か、概念整理によって明らかにするとともに、その分析手法を確立することが重要となる。

以上より、本論文は、地域住民の経験・記憶に基づいた地域景観を理解することが重要であると考え、これを明らかにするための分析手法の構築を目指す。

まず、2章では、景観や生活風景に関する既往研究や既存概念を参考に、視点の整理と分析対象の選定を行う。「2.1 環境のイメージの構成とその認識プロセス」では、既往研究や既存概念による風景の認識・生成過程を整理し、環境のイメージの認識プロセスとそれに応じて析出される成分から、日常生活に基づいた景観特性を理解するために本論で用いる経験・記憶という視点を示す。「2.2 記憶システムとエピソード記憶」では、既存の記憶システム概念について整理し、この概念に基づいて経験・記憶に関する景観研究を分類することで、本論文の位置付けを行う。「2.3 エピソード記憶としての生活史を分析対象とする意義」では、前節で整理した記憶システム概念のひとつであるエピソード記憶を捉えるための分析対象について整理し、生活史を分析対象とする意義を示す。「2.4 分

析対象の選定」では、本研究における分析対象とその選定理由を述べる。

続いて、3章では、テキストマイニングといった言語表現を分析する手法とその概念について整理し、経験・記憶から地域景観を理解するための新たな分析手法を構築する。まず、「3.1 言語表現を分析するための手法の整理」では、既往研究から言語による表現媒体の分析手法を整理する。「3.2 テキストマイニングに関する研究整理」では、分析の基礎概念としてのテキストマイニングについて既往研究を整理し、その有効性を示す。「3.3 言語学的概念を基礎とした手法の意義」では、テキストマイニングで使用される自然言語処理について提示し、言語学的概念を手法に用いる有効性を示す。「3.4 テキストマイニングに頼らない手法の意義」では、既存理論や既往研究から、テキストマイニングではない新たな分析手法の必要性を示す。「3.5 新たな分析手法の枠組み」では、本論で用いる分析手法の枠組みを示す。その結果、本論文では、要素の抽出に、文法や言語論などのテキストマイニングでも用いられる言語学的概念に基づいてルールを設定し、要素の抽出・構造化を試みることにした。要素となる名詞句の抽出は、テキストマイニングでも用いられる文法的関係のひとつである格助詞を抽出の目印とする。また、要素の抽出に用いた文法的関係・要素の役割と種類を手がかりに図化のルールを構築した。

4章では、3.5にて提示した新たな分析手法について、解釈による分析と新たな分析手法による経験・記憶の捉え方について、事例を用いた検証を行う。まず、「4.1 分析手法の検証のための事例選定」では、検証のための事例に『苦海浄土』を選定する。そして、事例『苦海浄土』において検証に用いる分析対象の選定を「4.2 分析対象『苦海浄土』第一部第三章「ゆき女聞き書」」にて行う。この分析対象について、①石牟礼作品に対する解釈②3.5.1にて提案した手法で抽出された要素の定量分析③3.5.2にて提案した手法による図化、の3つを比較し、新たな分析手法の検証を行う。まず、「4.3 『苦海浄土』第一部第三章「ゆき女聞き書」に対する解釈」において、『苦海浄土』や石牟礼作品の特徴について既往文献から整理する。次に、「4.4 定量分析による抽出された要素の傾向把握」では、3.5.1にて提案した手法で抽出された要素の定量分析を行う。この時、分析対象を海上に関する記述、地上に関する記述、その他の記述に分類し、それぞれの記述における要素の抽出傾向を把握する。「4.5 新たな分析手法による図化・考察」では、3.5.2にて提示した図化のルールにより海上・地上・その他の記述で図化し、考察する。最後に、「4.6 新たな分析手法の検証」にて、解釈・定量分析・図化の結果を比較することで、提示した新たな分析手法の可能性を示すことで、分析手法の検証を行う。その結果、提案した分析手法では、『苦海浄土』の解釈で挙げられた農民の視座という内部から表現した農民の生活体験について、海上・地上・その他の記述ごとに詳細に分析することができ、各記述の傾向や生活体験の捉え方について明らかにすることができた。以上の結果より、新たな分析手法では、生活体験の捉え方を分析できる可能性を有していると考えられる。

5章では、生活史『街は記憶する』に対して提案手法を適用し、記憶・経験における地域景観について、事例分析として分析・考察する。3章で取り上げたテキストマイニングの概念を応用して、提案した手法を用いて、分析・検証する。「5.1 分析対象『街は記憶する』」では、分析対象として選定した『街は記憶する』という書籍に収録された生活史につ

いて紹介する。「5.2 抽出された要素の分類」では、抽出された要素の分類の概念を示す。

「5.3 定量分析による抽出された要素の傾向把握」では、『街は記憶する』から抽出された要素に対してクロス集計を行い、抽出された要素の傾向を把握する。「5.4 図化・考察」では、3章で提案した図化手法を用いて図化を行い、その結果について各個人ごとに考察する。

「5.5 要素の構造的特徴」では、繰り返し要素、包括要素、その他の要素と分類した要素ごとに、各要素の機能と図の様相から構造的特徴について考察する。「5.6 経験・記憶における要素の意味や内容による特徴」では、各要素の意味や内容による特徴を整理し、「5.7 経験・記憶に基づいた地域景観」で経験・記憶に基づいた地域景観として考察する。最後に、「5.8 新しい分析手法の成果と課題」にて、新しい分析手法の成果と課題を整理する。

その結果、抽出された要素と文法に基づいた図化から、繰り返し要素の機能的特性は記憶の変化点や結節点であり、物性的特性は拠点性・中心性・刺激性であることを明らかにした。また、包括要素の機能的特性は記憶の集合体を形成することで、物性的特性は地域性・属性・時代性であり、どの物性的特性によって集合体を形成するかは人により異なることがわかった。対象地に対して、繰り返し要素を介して繋がるか、包括要素内に含まれているか、によって要素を分類し、地域別に特徴を考察した。その結果、人の認識は時間経過と共に変化するだけではなく、その経験頻度によって記憶される要素に違いが発生する可能性を示した。また、記憶・経験に基づいた地域景観を捉える際には、ランドマークや行動拠点による空間的要素、関わりがある個人や所属組織といった物的要素、非日常的な出来事としての媒質要素が手がかかりとなる可能性が明らかになった。特に、空間的要素や物的要素は日常的な利用や関わりが、記憶を構成する際の骨格になっているといえる。このことから、記憶・経験に基づいた地域景観には、日常的な利活用や人同士の関わりを踏まえた地域計画やまちづくりを考えることが重要になると示唆した。また、本論文で構築した分析手法の有効性について、確認することができた。